

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 6月 5日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2011

課題番号：21530653

研究課題名（和文）

社会環境が社会化に及ぼす影響に関する総合的研究

研究課題名（英文）

Effects of Social Environment on Socialization

研究代表者

吉田 俊和（YOSIDA TOSHIKAZU）

名古屋大学・教育発達科学研究科・教授

研究者番号：70131216

研究成果の概要（和文）：

本研究の成果は以下の3点にまとめることができる。第1に、地方自治体の統計指標を用いて抽出した地域ごとに、集合的有能感や地域住民の交流といった社会環境が中学生の社会的逸脱行為ならびに向社会的行動に与える影響を検討した。第2に、集合的有能感や共同体暴力経験が社会的逸脱行為に与える影響について、4ヶ国（日本、中国、韓国、米国）の国際比較を行った。第3に、中学生や高校生、大学生のデータを比較し、子どもの社会化がどのように発達するのかについて検討した。

研究成果の概要（英文）：

This study investigated (a) effects of social environment (i.e., neighborhood collective efficacy and social interaction with community residents) on antisocial behavior and prosocial behavior of junior high-school students, (b) effects of collective efficacy and community violence exposure on antisocial behavior in four countries (i.e., Japan, China, Korea, and the United States), (c) developmental processes of socialization of adolescents.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・社会心理学

キーワード：集合的有能感・社会的情報処理・社会的自己制御・社会的逸脱行為・社会的迷惑行為・向社会的行動・共同体暴力経験・地域住民間の交流・地域への愛着

1. 研究開始当初の背景

現代の日本では、「健全で安心できる社会の実現」と「教育力の再生」が解決すべき急務の課題となっている。殺人をはじめとした子どもによる凶悪な犯罪や非行、ないしは自己の欲求充足を優先して周りの他者を不快にさせる社会的迷惑行為は、増加の一途をたどっている。

こうした反社会的行為の凶悪化や社会的迷惑行為の増加の背景には、複数の社会的要

因に起因する青年の社会化の失敗があると考えられる。たとえば、(1) 共同体社会の崩壊と生活空間の拡大により、相互監視システムが機能しなくなったこと、(2) 情報化社会への移行に伴い価値観の多様化が進み個人の価値判断が優先されるように社会が変化してきたことによって、青年に明確な規範意識を内在化させることができなくなった、などが挙げられる。実際に、申請者たちは、社会的情報処理の問題や自己制御機能の欠陥

を修正することで、社会的逸脱行為ならびに社会的迷惑行為を抑制する可能性を見出してきた (原田他, 2009; 吉田他, 20002, 2005; 吉澤・吉田, 2004, 2005)。

しかし一方で、社会的情報処理や自己制御といった個人の社会化を反映する能力ないし機能が、どのような要因によって形成または促進されるのかについては十分に検討されていない。個人の社会化のあり方は、友人・仲間集団との相互影響や学校場面における心理教育プログラムなどの近接的要因から影響を受けるだけでなく、社会システムや社会環境といった遠隔的要因によっても規定されると考えられる。

本プロジェクトの目的は、家庭や学校などの近接的要因、ならびに社会システムや社会環境といった遠隔的要因も含めた多層的な環境要因が、社会的情報処理や自己制御機能に与える影響を解明することであった。これによって、ミクロな個別の対応とマクロな社会システム的対応という双方の視点から、子どもの反社会的な行動を減少させるための施策の提案を目指した。

2. 研究の目的

1. 吉澤・吉田 (2004) で提唱された因果モデルに基づき、単一の親友や仲間集団との相互影響過程が、社会的情報処理や社会的逸脱行為傾向における主観的な認知レベルで生じているのか、それとも客観的な行動レベルでも起きているのかを検討した。また本研究では、先行研究と同様に、上記の相互影響が親友よりも仲間集団との間で強くみられるかどうかについても検討した。
2. 地域共同体の肯定的側面である集合的有能感、ならびに否定的側面である共同体暴力が、反社会的行動の生起に及ぼす影響を検討するため、以下の3つの仮説を設定した。(a) 集合的有能感は効果的な社会化を促進することで、反社会的行動を抑制する。(b) 集合的有能感の欠如は、効果的な地域環境の統制を困難にし、共同体での暴力発生を増加させるため、個人の反社会的行動を促進する。(c) 集合的有能感の欠如は、反社会的行動に接触する日常活動を増加させ、それらの行動の生起頻度を高める。
3. 地域住民との公的・私的な交流が、集合的有能感 (非公式な社会的統制、社会的凝集性・信頼) や社会的自己制御を媒介して、社会的逸脱行為の悪質性を軽視する態度の抑制につながるかどうかを検討するため、以下の3つの仮説を設定した。(a) 非公式な社会的統制は、地域住

民との私的な交流よりも公的な交流によって促進される、(b) 社会的凝集性・信頼は、地域住民との公的な交流よりも私的な交流によって促進される、(c) 地域住民との交流は、集合的有能感を媒介して社会的自己制御を促すだけでなく、社会的自己制御を直接的に促すことで、悪質性軽視の態度を抑制する。

4. 社会的自己制御が問題行動に与える影響は、行動抑制システム (BIS) や行動接近システム (BAS)、エフォートフル・コントロール (EC) といった気質レベルの自己制御による効果と弁別されるのかどうかを検討した。具体的には、(a) 社会的自己制御は社会的場面における問題行動への予測力が高く、(b) 気質レベルの自己制御は個人的な問題行動への予測力が高いという仮説を設定した。
 5. 社会システムや文化が異なる4ヶ国 (日本、韓国、中国、米国) を対象に、集合的有能感や共同体暴力経験が社会的情報処理に与える影響を検討した。
 6. 中学生から大学生までの青年期において、社会的自己制御がどのように発達していくのかを実証的に検討した。
- ## 3. 研究の方法
1. 高校生266名と中学生153名を分析対象とした。いずれも質問紙調査を行い、社会的情報処理 (吉澤・吉田, 2004) や社会的逸脱行為を測定した。
 2. 大学生に質問紙調査を実施し、503名を分析対象とした。集合的有能感を測定するため、提唱者である Sampson et al. (1997) の理論的定義に従い、独自に尺度を作成した。その他に、社会的情報処理 (吉澤・吉田, 2004) や社会的自己制御 (原田他, 2008) などを測定した。
 3. 中学生に質問紙調査を実施し、2763名を分析対象とした。地域住民との公的・私的な交流や集合的有能感 (吉澤他, 2009)、社会的逸脱行為の悪質性を軽視する態度などを測定した。
 4. 質問紙調査を行い、高校生199名、大学生429名を分析対象とした。社会的自己制御 (原田他, 2008) や BIS/BAS、EC、各種の問題行動を測定した。
 5. 各国の大学生に質問紙調査を実施し、日本585名、韓国344名、中国265名、米国84名を分析対象とした。集合的有能

感 (吉澤他, 2009) や共同体暴力経験、社会的情報処理 (吉澤・吉田, 2004) などを測定した。

6. 質問紙調査を行い、中学 1・2 年生 4163 名、高校 1・2 年生 782 名、大学生 955 名を分析対象とした。社会的自己制御 (原田他, 2008) の下位因子である自己主張、持続的対処・根気、感情・欲求抑制の 3 つを測定した。
4. 研究成果
 1. 構造方程式モデリングによる分析の結果、仮説が支持された。親友や仲間集団との相互影響過程は行動レベルよりも認知レベルで生じており、特に仲間集団との相互影響が個人の社会的逸脱行為傾向を高めていることが示された。さらに、親友と仲間集団との間で、異なる知見が得られた。単一の親友との相互影響は、個人が逸脱的な他者を親友として意図的に選択することを示していた。一方で、仲間集団との相互影響は、個人が仲間集団から逸脱性のトレーニングを受けていることを示唆していた。
 2. 構造方程式モデリングによる分析の結果、仮説は支持された。集合的有能感は、直接的ではなく、社会化指標を媒介して間接的に反社会的行動に影響することが確認された。住民間の信頼や絆を醸成することが、地域の問題に対処するための具体的方法 (子どもへの関わり方など) のトレーニングや連携システムの構築方法の学習につながり、子どもの社会化や反社会的行動の減少を可能にすることが示唆された。またその前提として、集合的有能感を醸成するような交流の機会を地域住民たちに提供することは、必要不可欠といえる。
 3. 構造方程式モデリングによる分析の結果、仮説が支持された。地域住民との交流は、集合的有能感を媒介して間接的に社会的自己制御を高めるとともに、直接的に社会的自己制御を促進することで、社会的逸脱行為の悪質性を軽視させないようにすることが示された。また、地域住民との交流、特に公的な交流が欠如しているという現状を実証的にとらえた点でも、本知見は意義深い。
 4. 階層的重回帰分析の結果、仮説はおおむね支持された。社会的自己制御による独自の効果は、衝動的購買行動や摂食障害傾向といった個人的問題行動よりも、迷惑行為や逸脱行為といった社会的問題

行動に対して強いことが示された。今後は、本研究で扱わなかったものも含め、さまざまに提唱されている自己制御概念を整理する必要がある。

5. 階層的重回帰分析の結果、韓国や中国、米国において、社会システムに関わる指標をコントロールしてもなお、集合的有能感ならびに共同体暴力経験は社会的逸脱行為や攻撃的な信念などを抑制することが示された。しかし、日本では、集合的有能感や共同体暴力経験の効果はそれほど強くないという文化差が認められた。
6. 社会的自己制御の 3 つの下位因子ごとに分散分析を行った結果、自己主張は大学 1・2 年時に一旦下降することが示された。持続的対処・根気は、高校 1 年生のときに顕著に低くなっていた。感情・欲求抑制は中学生から大学生にかけて徐々に発達していく様相がみられた。
5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)
〔雑誌論文〕 (計 8 件)
 1. 朴 晶賢・尾関美喜・中島 誠・吉澤寛之・原田知佳・吉田俊和 地域社会が中学生の問題行動に及ぼす影響 — 規範意識の低下が引き起こす学校の荒れに着目した検討 — 犯罪心理学研究, **49**, 39-50. (2012). 査読有
 2. 吉田琢哉・原田知佳・吉澤寛之・中島誠・尾関美喜・吉田俊和 地域住民との交流が中学生の反社会的態度の抑制に及ぼす影響 — 集合的有能感と社会的自己制御による媒介モデルの検討 — 東海心理学研究, **5**, 26-32. (2011). 査読有
 3. 吉田俊和・吉澤寛之・中島誠・朴晶賢・尾関美喜・原田知佳 社会環境が反社会的行動の生起に及ぼす影響 — 社会的情報処理と情動制御による媒介モデルの検討 — 季刊 社会安全, **76**, 27-36. (2010). 査読無
 4. 吉澤寛之・吉田俊和 中高生における親友・仲間集団との反社会性の相互影響 — 社会的情報処理モデルに基づく検討 — 実験社会心理学研究, **50**, 103-116. (2010). 査読有
 5. 原田知佳・吉澤寛之・吉田俊和 社会的自己制御と BIS/BAS・Effortful Control による問題行動の弁別的予測性 パーツ

ナリティ研究, 19, 76-78. (2010). 査読有

6. 吉澤寛之・吉田俊和・原田知佳・海上智昭・朴賢晶・中島誠・尾関美喜 社会環境が反社会的行動に及ぼす影響—社会化と日常活動による媒介モデル— 心理学研究, 80, 33-41. (2009). 査読有
7. 朴賢晶・出口拓彦・吉田俊和 「個人規範」および「集団規範の認知」が個人の「行動」に及ぼす影響の日韓比較研究—学校適応感と孤独感を中心に— 東海心理学研究, 4, 34-46. (2009). 査読有
8. 尾関美喜・吉澤寛之・中島誠・吉田琢哉・原田知佳・吉田俊和 地域住民との社会的交流が子どもの向社会的行動に及ぼす影響 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 56, 1-10. (2009). 査読無

[学会発表] (計 18 件)

1. 吉澤寛之・中島誠・吉田琢哉・尾関美喜・原田知佳・吉田俊和 (2011). 社会環境が社会化に及ぼす影響 (6) —集合的有能感から社会的情報処理への影響力の地域間普遍性— 日本グループ・ダイナミクス学会第 58 回大会発表論文集, 86-87. 昭和女子大学 (2011年8月23日)
2. Yoshizawa, H. Universality in the protective effect of neighborhood collective efficacy on antisocial cognitive biases among Japanese adolescents. Poster session presented at the 16th World Congress of the International Society for Criminology, Kobe, Japan. (2011, August 8).
3. 吉澤寛之 親の養育・しつけが反社会的行動に及ぼす弁別的影響—適応性を考慮した社会的情報処理による媒介モデルの検証— 日本教育心理学会第 53 回総会 北海道立道民活動センターかでの 2・7 (2011年7月24日)
4. 原田知佳・吉澤寛之・中島誠・吉田琢哉・尾関美喜・吉田俊和 社会的自己制御の発達の变化の検討—中学生・高校生・大学生を対象とした横断的調査— 日本教育心理学会第 53 回総会, 179. 北海道立道民活動センターかでの 2・7 (2011年7月24日)
5. Yoshizawa, H., Yoshida, T., Park, H., Nakajima, M., Ozeki, M., & Harada, C. The power of neighborhood interaction factors versus social composition in predicting

social development: International research of Asian and American adolescents. Hybrid poster session presented at the 12th European Congress of Psychology, Istanbul, Turkey. (2011, July 7).

6. 原田知佳・吉澤寛之・中島誠・吉田琢哉・尾関美喜・吉田俊和 社会環境が社会化に及ぼす影響 (7) —中学生の向社会的行動を導く自己制御媒介モデルの検討— 東海心理学会第 60 回大会発表論文集, 32. 三重大学 (2011年6月5日)
7. 吉澤寛之・中島誠・吉田琢哉・尾関美喜・原田知佳・吉田俊和 社会環境が社会化に及ぼす影響 (5) —地域間階層的データによる集合的有能感媒介モデルの検討— 日本社会心理学会第 51 回大会発表論文集, 36-37. 広島大学 (2010年9月17日).
8. 原田知佳・吉澤寛之・朴賢晶・中島誠・尾関美喜・吉田俊和 社会的自己制御の国際比較—日・韓・中・米の青年期を対象に— 日本グループ・ダイナミクス学会第 57 回大会, 142-143. 東京国際大学 (2010年8月29日)
9. 吉澤寛之・原田知佳・朴賢晶・中島誠・尾関美喜・吉田俊和 社会環境が社会的行動に及ぼす影響 (14) —国際データを用いた社会構造指標と集合的有能感および共同体暴力経験との影響力の比較— 日本グループ・ダイナミクス学会第 57 回大会, 140-141. 東京国際大学 (2010年8月29日)
10. 尾関美喜・吉澤寛之・中島誠・吉田琢哉・原田知佳・吉田俊和 社会環境が社会化に及ぼす影響 (4) —地域からの恩恵と地域への愛着が向社会的行動に及ぼす影響— 日本教育心理学会第 52 回総会, K156. 早稲田大学 (2010年8月27日)
11. Yoshizawa, H., Harada, C., Park, H., Nakajima, M., Ozeki, M., & Yoshida, T. Efficacious social control in neighborhoods prevents antisocial behavior: Mediation of socialization and unstructured activities. Brief oral presentation announced at the 27th International Congress of Applied Psychology, Melbourne, Australia. (2010, July 14).
12. Harada, C., Tsuchiya, K., & Yoshida, T. The effect of positive/negative experiences in

interpersonal and achievement domains on social self-regulation. Poster session presented at the 27th International Congress of Applied Psychology, Melbourne, Australia. (2010, July 11-16 (エレクトロニック・ポスターのため、web 上にて全期間掲示・議論は 15 日に設定)).

13. 尾関美喜・吉澤寛之・中島 誠・吉田琢哉・原田知佳・吉田俊和 社会環境が社会化に及ぼす影響 (3) —住民同士の相互作用と地域への愛着が向社会的行動に及ぼす影響— 日本社会心理学会第 50 回大会・日本グループ・ダイナミックス学会第 56 回大会合同大会, 1116-1117. 大阪大学 (2009 年 10 月 12 日)
14. 吉田俊和・中島 誠・吉田琢哉・尾関美喜・原田知佳・吉澤寛之 社会環境が社会化に及ぼす影響 (2) —集合的有能感と地域住民への接触頻度の関連性— 日本社会心理学会第 50 回大会・日本グループ・ダイナミックス学会第 56 回大会合同大会, 1114-1115. 大阪大学 (2009 年 10 月 12 日)
15. 吉澤寛之・中島 誠・吉田琢哉・尾関美喜・原田知佳・吉田俊和 (2009). 社会環境が社会化に及ぼす影響 (1) —地域間階層のデータによる社会的情報処理への影響比較— 日本社会心理学会第 50 回大会・日本グループ・ダイナミックス学会第 56 回大会合同大会, 1112-1113. 大阪大学 (2009 年 10 月 12 日)
16. 吉澤寛之・原田知佳・朴 賢晶・中島 誠・尾関美喜・吉田俊和 社会環境が社会的行動に及ぼす影響 (13) —社会化要因を媒介した反社会的行動規定モデルの国際比較— 日本社会心理学会第 50 回大会・日本グループ・ダイナミックス学会第 56 回大会合同大会, 144-145. 大阪大学 (2009 年 10 月 12 日)
17. 原田知佳・吉田俊和 社会的自己制御の形成・促進要因の検討 —対人および達成領域のポジティブ・ネガティブ経験に着目して— 日本社会心理学会第 50 回大会・日本グループ・ダイナミックス学会第 56 回大会合同大会, 536-537. 大阪大学 (2009 年 10 月 10 日)
18. Harada, C., Yoshizawa, H., & Yoshida, T. Predictability of self-regulation on externalizing problem behaviors: Focusing on different self-regulatory functions. Poster session presented at the

biennial meeting of the Society for Research in Child Development, Denver, Colorado. (2009, April 4).

〔図書〕 (計 2 件)

1. 吉田俊和・元吉忠寛 (編) ナカニシヤ出版 体験で学ぶ社会心理学 (2010). 全 196 ページ
2. 吉田俊和・斎藤和志・北折充隆 (編) ナカニシヤ出版 社会的迷惑の心理学 (2009). 全 189 ページ

〔その他〕

ホームページ等

<http://psych.educa.nagoya-u.ac.jp/yoshida/wiki/index.cgi?page=yoshidalab>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉田 俊和 (YOSHIDA TOSHIKAZU)
名古屋大学・大学院教育発達科学研究科・教授
研究者番号 : 70131216

(2) 研究分担者

吉澤 寛之 (YOSHIKAWA HIROYUKI)
岐阜聖徳学園大学・教育学部・准教授
研究者番号 : 70449453